

「節分」の成り立ち

豆まきは室町の昔から

節分の風習

立春の前日の二月三日は節分です。

この日、家々では、柵しほの枝にいわしの頭を刺して、門口にさしはさみます。柵にはとげがあり、いわしの頭は変わった形をしているので、鬼が恐れるからだとか、鬼はいわしのおいを嫌うし、柵の枝は悪魔払いの役目を果たしてくれるからだというのが、その理由のようです。

そして、夕暮れになると、どの家でも「福は内、鬼は外」と、その家の主人か子どもたちが大声を張り上げて、豆まきを行います。

その後で家族揃って、各人が年齢の数だけ豆を食べます。なぜ豆をまき、豆を食べる

のでしようか。「豆」は、壮健・忠実・勤勉などの意味を持ち、「魔目」(悪魔の目)・「魔滅」(悪魔を滅ぼす)などに通ずるといわれ、豆は悪魔払いの武器であり、また、食べることによって、厄を除き家々の無病息災や繁栄が叶う、と考えたのではないのでしょうか。

子どもころは、夕食後、近くのお大師様の境内で行わ

節分のおこり

節分の行事はいつごろから始まったのでしょうか。調べてみると、二つの説がありそ

節分行事が行われる東町にあるお大師様

門口に掲げたいわしの頭を刺した柵の枝

うです。

一つは、中国の周の時代に始まって、わが国の宮中にとり入れられた追儼おんげんの行事が、その始めであるという説です。「続日本紀」という本により

ますと、西暦706年(慶雲3)、各地に疫病が流行し、多くの死者が出たので、文武天皇が大晦日の晩に、紫宸殿むらさきみくらで疫病をもたらず邪気を払う儀式を行うことにしたとい

広まり、節分の行事になったというのです。(ただし、宮中では追儼と節分の行事は、全く別々に行われていました。)二つめは、お寺で新年の幸運を祈願し説法する正月定例の集会(法会)に、宮中の追儼の鬼を登場させるようになり、更に節分の夜に追儼の儀式と豆まきを、お寺や神社で行うようになっていったという説です。

のです。それは、4つ目の仮面をかぶり、熊の皮を身につけた方相氏と呼ばれる役の者が、大声をあげて、右手に持った鉾こで、左手に持った楯たてを三回打ちならします。その合図で、臣下の者たちが四方に分かれて、目に見えない鬼どもを、杖と弓矢で追い出して邪気を払うというものだったといわれます。

記録を調べますと、「福は内、鬼は外」と唱えることや、豆をまく風習の始まったのは、十五世紀前半(室町時代)のことであるので、お寺や神社の節分の行事は、このころ形を整え、次第に民衆の間に普及していったのではないのでしょうか。

この追儼は、平安時代の末ごろに、奇妙な姿をした方相氏を鬼に見立てて外に追い払うという形に変わりましたが、宮中の伝統行事として、少なくとも江戸時代の始めごろまでは、続けられたように思われます。

その後、江戸時代になりますと、宮中の追儼の行事が衰えていったのに対して、厄除けの意味をもつようになった節分の行事は、それぞれのお寺や神社で競い合うように盛んになり、一般民衆の間にも広く伝統行事として定着し、今日の基を築いて来たように思われます。(文化財審議委員 林 静男)